

於満稲荷の来歴

安藤優一郎

はじめに

江戸は、稲荷の多い町で知られていました。江戸城内、大名・旗本・御家人などの武家屋敷、あるいは商人の屋敷で祀られるほか、各町でも祀られました。日本橋に鎮座する於満稲荷は、そんな省内で祀られている稲荷の一つです。

屋敷に祀られる稲荷は屋敷神として、商人の屋敷に祀られる稲荷は商売繁盛の神として厚く信仰されましたが、於満稲荷は日本橋に住む商人たちが於満の遺徳を称え、その恵みは享受し続けるために勧請し、現在も厚く信仰されている稲荷です。その由来と来歴をみてみます。

1. お万の方と日本橋

徳川家康が江戸の町に入ったのは天正 18 年(1590)のことです。その頃、まだ日本橋の街は造られていませんでしたが、慶長 8 年(1603)に家康が将軍に任命されて江戸幕府を開くと、江戸は将軍のお膝元として巨大化していきます。そして日本橋は、江戸城や大名・旗本・御家人の屋敷に生活物資を供給する商人が住む町として発展を遂げます。将軍家や大名家の御用達として財を築くのです。

そんな江戸の開祖である家康には、記録に残っているだけで 2 人の正室のほか 20 人近くもの側室がいました。正室・側室との間に 16 人の子供を儲けましたが、跡を継いだ 2 代将軍秀忠とは 20 才以上も年が離れた弟に、紀州徳川家の初代徳川頼宣、水戸徳川家の初代徳川頼房がいます。徳川御三家初代のうち二人までも産んだ女性こそ於満稲荷の名づけ親とも言うべきお万の方でした。

お万の方は天正 8 年(1580)に、南総里見八犬伝で知られる安房国の大名里見家の家老正木邦時の娘として生まれます。15 才の時、既に 50 歳を越えていた家康に見初められ側室となりました。慶長 7 年(1602)に頼宣、翌 8 年(1603)に頼房を産みますが、家康が死去すると落飾して養珠院と称します。承応 2 年(1653)に 74 才で没しますが、日蓮宗の信者であったことから、山梨県にある大野山本遠寺に葬られました。

ちょうど、家康の曾孫にあたる 4 代将軍に徳川家綱の治世がはじまったばかりの頃でした。お万の方の息子頼宣・頼房兄弟は、家綱からみると大叔父にあたります。

江戸時代は参勤交代制度により、諸大名は江戸と国元で 1 年ずつ過ごしましたが、徳川御三家は江戸にいることの方がはるかに多く、国元に戻るのは稀でした。特に水戸家は江戸常府といって、水戸ではなく江戸で生活することが義務付けられていました。

その分、紀州・水戸藩は他藩以上に江戸での生活物資が必要になります。他藩にしても殿様だけではなく、数百人から数千人にも及ぶ家来が江戸屋敷で暮らすため莫大な生活物資が必要でしたが、その調達にあたったのが日本橋の商人でした。なかでも、紀州・水戸藩は他藩とは違って江戸での暮らしが長かったため、両藩に出入りできれば、その分多くの利益が得られることになります。

於満稲荷が鎮座する日本橋 3 丁目は、江戸の頃は上槓町と言いました。切絵図に示されているように、外堀(現在の外堀通り)に面する形で南北に広がる日本橋の承認・職人町(呉服店、檜物町、大工町、紺屋町)の一つでした。江戸城や大名屋敷などの武家屋敷に出入りし、衣料品や家具などの調度品を納めることで財をなした商

人の町でした。

具体的な経緯は分かりませんが、お万の方と縁をもった上槇町の商人は紀州・水戸藩の屋敷に出入りするようになり、多大な利益を得ることになります。紀州・水戸藩の生母クラスの女性となれば、高級品を並べる日本橋の豪商のもとに立ち寄って買い物をするのは日常的なことでしたが、そうした機会を通じて上槇町の商人はお万の方がお得意先となります。商人の側から言えば、お万の方との人脈をつてに紀州・水戸藩に出入りできるチャンスが訪れ、紀州・水戸藩御用達への道が開かれるというわけです。藩主の生母の推薦となれば、これほど強いものはありません。

さらに、日蓮宗の熱心な信徒だったお万の方は、上槇町の商人から池上本門寺などの寺院に寄付する品を調達したと伝えられています。紀州・水戸藩の生母ですから購入する品は当然ながら高価な品であり、商人側にとっては上客でした。お万の方は、上槇町の商人にとっては商売繁盛の守り神のような存在でした。

お万の方がこの世を去って4年後の明暦3年(1657)正月に、江戸では明暦の大火と呼ばれる大火事が起きます。日本橋はおろか江戸城も灰燼に帰しました。しかし、これを契機に幕府は江戸の大改造に取り組み、世界最大の都市として飛躍する基盤が造られていきますが、そんな復興の過程で日本橋の商人は財をなします。江戸城だけでなく、大名屋敷も再建されたからです。お万の方を通じて紀州・水戸家についてを持っていたことは、上槇町の商人にとり実に大きかったのです。

そんな一連の過程を経て、上槇町の商人たちはお万の方に感謝するとともに、その遺徳を顕彰し続けるため、稲荷を町内に勧請します。さらなる商売繁盛も祈願していきますが、その社名を於満と名付けます。本来ならば於万稲荷ですが、紀州・水戸藩を憚って於満に改名されたのでしょう。こうして、明暦の大火から江戸が復興する過程の寛文年間(1661～72)に、於満稲荷が上槇町の地に生まれたのです。

2. 高まる於満稲荷の人気

江戸そして日本橋の復興過程で生まれた於満稲荷ですが、その後も江戸経済の発展を支えた上槇町の商人によって厚く信仰されます。やがて、その名前が日本橋はおろか江戸の町で知られるほどの稲荷になります。

知名度がアップすると、その人気にあやかった商売が生まれるのは江戸も今も変わりありません。その一つが於満寿司でした。

稲荷寿司があるくらいですから、於満稲荷に限らず、稲荷寿司は稲荷に参詣した人に売られた定番の商品でした。なかでも於満寿司は人気商品でした。

上槇町には、料理茶屋も店を構えています。日本橋の街には、主に商人たちが接待や会場場所として用いた料理茶屋が点在していましたが、そうした料理茶屋の一つでもある紀伊国屋吉右衛門は於満寿司を売り出します。紀伊国屋藤右衛門という料理茶屋も於満寿司を売り出しており、於満寿司と言っても一つではありませんでした。

於満寿司が登場したのは、宝暦(1751～64)の頃です。10代将軍徳川家治の頃でした。

賄賂政治家のイメージが強い田沼意次が政権の座にあった時代です。

この二つの店の屋号は、いずれも紀伊国屋です。江戸には紀伊国屋文左衛門をはじめ、紀州から出店してきた商人が多かったのですが、於満寿司を売り出した二人の紀伊国屋も同じく紀州から江戸に出てきた商人でした。

於満寿司を売った二つの料理茶屋の屋号から、お万の方が立ち寄った上槇町にも紀州出身の商人が店を構えていたことが分かりますが、お万の方をお得意先とした上槇町の商人は紀州から出てきた商人だったのかもし

れません。息子が藩主をつとめる藩の領民の店となれば、自ずから親近感を覚えたことでしょう。

於満寿司を売っていたのは、日本橋の料理茶屋だけではありません。日本橋の堺町に本店を構える料理茶屋ふじ屋利右衛門が、浅草に出していた店でも売られていました。もちろん本店でも売っていましたが、浅草でも於満稲荷の名前は知られていたことが分かります。

於満稲荷は、寿司のほかにも様々な商品を生み出しました。お寿司のほか、紅などの化粧品も売られています。上槓町には化粧品を売る店もあったわけですが、どうやら於満寿司よりも先に「おまんが紅」という商品が女性の間では人気でした。単なる紅ではなく、おまんの名前が付けられたことで人気を呼んだのです。

プレミア感が付いたような感じで女性たちが買い求めたのでしょうが、於満稲荷の靈験があらたかだったということが人気の理由でしょう。パワースポットなどの靈力に魅かれる女性の心は江戸も今も変わりはありません。そして、その人気に目を付けた料理茶屋が於満寿司を売り出したというのが、真相だったようです。

このように、於満の名前が付けられた商品が各種売られていたということは、それだけ稲荷の名前が江戸で知られ、数多くの参詣者を集めていたことを教えてくれます。なぜ、於満稲荷はそれほどまでに江戸の人々に厚く信仰されたのでしょうか。

何とんでも、於満稲荷を厚く信仰する上槓町の商人たちがそれだけ財をなしていたということが大きかったのでしょう。お万の方ゆかりの於満稲荷に参詣すれば、その御利益を自分たちも身に付けられるという評判が江戸の町には広まっていた様子が分かります。

おわりに

日本橋は商人の街ということで、当時より数多くの稲荷がありました。稲荷の中には何かのきっかけで、突然爆発的に参詣者が増えることがありました。かつて日本橋 1 丁目にあった翁稲荷はその一つです。しかし、その流行は一時に過ぎず、現在は茅場町に日枝神社ないの明德稲荷神社に合祀されています。

しかし、於満稲荷は何かのきっかけということではなく、寛文年間以来の歴史の積み重ねが参詣者を集め、その流行にあやかった商品も生み出しました。今も日本橋の地に鎮座し、紀州・水戸藩つまりは徳川家とのゆかりを伝えています。